

## 講義①

### 「市民と創る成長する図書館」

講師：伊万里市民図書館前館長 古瀬 義孝

#### 1 市民協働の図書館づくり

伊万里市の新図書館は平成7年に開館した。その9年前から図書館がほしいという市民運動が起こり、これに応えるために図書館建設に着手したという経緯がある。また、図書館の主役は市民であるという視点から、「図書館づくり伊万里塾」という学習会を8回開いた。そして、市民と共にアメリカの図書館の視察等を通して、共に学びながら理想の図書館を目指すことにした。設計の段階から市民の意見や希望を聞きながら建設を進め、新図書館の名称も伊万里市民図書館とした。これが、市民運動が盛んになる主な要因となる。

開館とともに「図書館フレンズいまり」という新組織が誕生した。合い言葉は「協力と提言」、図書館を愛する市民なら誰でも参加ができる。当初の会員は150名ほどだったが、今では倍増している。主な事業は正月のカルタ会、2月の起工式を記念したぜんざい会（芽生えの日）、7月の開館を記念した「ほし祭り」、俳句大会、年4回の古本市、庭園清掃や植栽等、年中行事化している。また、他のボランティアグループの活動も多く、図書館合唱団もあり、ピアノのある開架室ではコンサートも行なっている。

#### 2 現在の活動

どれほど市民活動が盛んでも図書館運営は、専門である図書館職員の尽力につきる。伊万里市民図書館は当初から全域平等のサービスと子供の読書推進に力点をおいてきた。全域平等のためにBM2台で巡回を行い、お話しキャラバンと一緒にお話会を展開するなど子供の読書推進に努めてきた。

実績がないと活動の単独予算が付かない。自主財源がなくても国県や外郭団体の支援金を20年間に18回獲得し、活発な事業を展開した。

レファレンスは重点的に取り組み、陶製万華鏡や万年筆の開発で起業したり、水力・風力発電で特許を4つ取得した利用者もいる。これまでの事業やフレンズの活動等が評価され、平成

28年に全国図書館大会で、ライブラリアンシップ賞を受賞した。

#### 3 これからの図書館と図書館のミッション

これからの方向性として、出版社からの批判もある貸出競争を煽るのではなく、生涯学習の拠点であると共に、「出会い・語り・学びあい」の広場機能を見直すことが求められる。そして、高齢者の生きがい対策、子育て支援など、読書の効果や図書館の機能を生かしたサービスを展開する必要がある。

また図書館が教育機関であることが忘れられてはいないだろうか。図書館はすべての人の成長と成熟、自己実現を支えるためのオアシスである。子どもの貧困や格差の広がり、反知性主義が横行する中、図書館こそが知のセーフティネットである。伊万里市は、設置条例第1条を「伊万里市は、すべての市民の知的自由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治の発展を促すため、自由で公平な資料と情報の提供をする生涯学習の拠点として、伊万里市民図書館を設置する」としている。

#### 4 不易と流行

松尾芭蕉の言葉に「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」という言葉がある。図書館の普遍の真理を守りながら、時代の要望を知り、新たな課題に答えていく。その努力をしなければ、顧みられなくなることを心配している。



▲講義①